

聖書：マルコの福音書 5：21～34

説教題：信仰が救った

日時：2025年8月17日（朝拝）

イエス様はガリラヤ湖東岸から船で渡り、西側のユダヤ人の町へ着かれました。すると大勢の群衆がみもとに集って来ました。そんな中、会堂司の一人でヤイロという人が来てイエス様の足もとにひれ伏します。会堂司とは、その町の会堂の建物や礼拝に責任を持っていた人で、この地域でそれなりの地位にあった人だと考えられます。さてご存知の通り、このヤイロの物語は今日の箇所だけでは完結せず、次回の箇所に続きます。そしてその間にもう一つの物語が入るといって「サンドイッチ構造」になっています。ですから今日はヤイロの物語は細部には入らず、今日と来週の箇所の導入として見て行きます。ヤイロは「私の小さい娘が死にかけています」とイエス様に告げます。ここのギリシャ語はエスカトスという言葉で、まさに終わりの状態にあるという意味です。その娘は死の淵にあり、今にも息を引き取りそうな状態にありました。それでもヤイロは、イエス様ならこの娘を癒やすことができると信じてイエス様のもとに来ました。ここに彼の信仰が現れています。行動に現れる信仰です。彼はイエス様の足元にひれ伏し、懇願しました。イエス様はどう対応されたのでしょうか。イエス様は彼の願いをすぐに受け入れて一緒に行かれました。私たちの必要にこのように答えてくださるイエス様の姿がここに 있습니다。すると大勢の群衆がイエス様について行き、イエス様に押し迫りました。

こんな緊迫した状況でもう一人の人物が登場します。長血をわずらっていた女の人は、彼女の登場によってヤイロの娘への奇跡は一時中断されますが、そのことが後のクライマックスを一層鮮やかなものにします。さて、この女性は大変な苦しみを背負っていました。12年の間、長血をわずらっていたとあります。おそらく婦人病の一種だったのでしょう。肉体的また精神的につらい状態にありました。それに加えてレビ記 15 章 25～33 節によると、この状態にある人は宗教的・儀式的に汚れた者とされていました。彼女自身も、また彼女が座ったものも、またそれに触れた人も汚れるとされていました。ですから人々の間に出て行くこともできません。社会生活もままならない状態にありました。26 節には「多くの医者からひどい目にあわされて」ともあります。これは医者が悪意をもって接したということでは必ずしもないようです。彼女を直そうとしても、そのための知識も薬もない。結局何ら助けにならなかった。出

て行くのはお金だけ。彼女はこうして持っているものをすべて使い果たした上、もっと悪くなっていました。まさに絶望的な状況です。

そんな彼女もイエス様のことを聞き、イエス様のもとにやって来ます。彼女はヤイロと違って表立って近づくことはできません。彼女は汚れた者です。本来ここに来てはいけない者です。そこで群衆に紛れて、ひそかにイエス様の後ろから近づき、イエス様の衣に触れました。それは『『あの方の衣にでも触れれば、私は救われる』と思っていたからである』と 28 節にあります。果たしてこの彼女の考えを私たちはどう見るべきでしょうか。これは当時の人々に一般的に見られた態度だったようです。マルコの福音書 3 章 10 節にも「イエスが多くの人を癒やされたので、病気に悩む人たちがみな、イエスにさわろうとして、みもとに押し寄せて来たのである」とありました。そこには迷信的な要素も混じっているように私たちには思われます。しかし後にイエス様がこの彼女の態度を指して、「あなたの信仰があなたを救ったのです」と言われますから、ここに良い面があったこと、信仰があったことは疑い得ません。その良い面とは何でしょうか。あとでも触れますが、それはイエス様なら私を救うことができると信じてイエス様に頼ったことでしょう。彼女はこの時、絶望の中にありました。あらゆる手を尽くして、すべてがうまく行きませんでした。その彼女は、イエス様に頼っても同じだとは考えませんでした。彼女はイエス様について聞き、この方なら私を救うことができると望みを抱いて、イエス様に近づきました。人々の中へ出て行ったら、どう扱われるか分からない状況の中です。ここに彼女の信仰があります。そしてこれが後に良しとされるのです。

その彼女はイエス様の衣に触れた瞬間、自分の病気が癒やされたことを感じました。そしてその瞬間、イエス様もご自分から力が出て行ったことを感じられました。ただ誰に対してその力が出て行ったのかは分かりませんでした。ここにイエス様の超自然的な力と人間的な側面が組み合わせられています。イエス様は後ろを振り向いて、「だれがわたしの衣にさわったのですか」と問われました。弟子たちにとってこの質問は意味が分かりませんでした。誰が触ったかと言われても、みんな触っているでしょ！これだけの群衆があなたに押し迫っているのですから！と彼らは考えました。しかしイエス様は特別な意味でご自分に触った人がいることを感じられたのです。彼女は誰にも知られず、こっそりこの場を去りたかったに違いありません。しかしイエス様は癒やしを与えるだけでなく、その人との個人的な出会いを求められました。それはその

人のためです。彼女は逃れられないと思ったのでしょう。自分の身に起こったことを知り、恐れおののきながら進み出て、イエス様の前にひれ伏し、真実をすべて話しました。この彼女にイエス様はどう対応されたのでしょうか。

イエス様はまず「娘よ」と語りかけられました。これは年齢や相手との関係に関係なく、女性に対する敬意と愛情を込めた呼びかけだったようです。そして言われました。「あなたの信仰があなたを救ったのです。」 イエス様はこう述べて、あなたが触ったから癒やされたのではないのですよ！ということをはっきり教えておられます。イエス様にただタッチするだけなら、ある意味でみんなタッチしていました。そうではなく、「あなたの信仰」が救ったのです。信仰があなたを救ったのです！と言われました。しかしこれはもしかすると取り違えやすい言葉でもあるかもしれません。「あなたの信仰があなたを救ったのです」という言葉を聞くと、私たちは、では私の信仰はどうだろうか？と自分自身を覗き込むようなことをし始めるかもしれません。自分の信仰は立派だろうか？イエス様に認められるものだろうか？と自分を見つめる方向にばかり目が行くかもしれません。しかし信仰の本質とは、自分から目を離して、より頼むべき相手の方にこそ目を向けることです。そして相手を信じることです。この長血をわずらっていた女も、自分を見つめるだけなら絶望しかありませんでした。自分は自分を救えないことを認めて、ただイエス様を見つめ、イエス様により頼むこと。これが信仰です。ですからイエス様がここで「信仰が救った」と言っている意味は、わたしへのより頼みがあなたを救ったということです。もっと言えば、救ったのはわたしだということです。イエス様はこう述べて、これからもイエス様により頼む信仰に生きるようにと励まされたのです。

またイエス様がここで「あなたの信仰があなたを救ったのです」と言っている時の救いは、肉体の救いを越えて、霊的な救いにまで及ぶものです。イエス様は実にこの意味での救いを与えようとしてこの世に来られました。ですからこの福音書 2 章で、中風の人がイエス様の前に連れて来られた時も、イエス様は彼にまず「子よ、あなたの罪は赦されました」と言われました。肉体的な癒やし以上の祝福、すなわち罪の赦し、また神との正しい関係に回復させるという真の祝福に生かすためにこそイエス様は来られました。ですからここでもイエス様は「安心して行きなさい」と言われました。これは直訳すれば「平和の中へと行け」という言葉になっています。つまりここで考えられている平和とは何よりも神との平和です。その神との平和の祝福の中へと

歩め！これは神の国の祝福の中に歩め！と同じです。そして最後に「健やかでいなさい」と言います。神との正しい関係回復にこそ健やかな生活、健全で健康的な生活があります。その祝福の中に歩み続けよ！と言われたのです。

以上の箇所から以下の3つのメッセージを心に留めたいと思います。まず一つ目は、ここにはイエス様による神の国の到来の祝福が描かれているということです。すでに前回、前々回と申し上げましたように、4章35節から5章の終わりまでは、イエス様が様々な力の上に権威を持ちたまう方であることが連続して描かれています。4章最後の記事では大自然の上に権威を持つイエス様が描かれました。前回の5章最初の記事では悪霊（レギオン）の上にも権威を持つイエス様が描かれました。そして今日の箇所では不治の病の上にも権威を持つイエス様が描かれ、さらに次回のヤイロの娘の物語では死の上にも主権を持つイエス様が記されます。このように私たちの罪がもたらしたあらゆる災いの上にも主権を持ち、そこから私たちを救い出すことのできるイエス様が来られた！ということこそ、これらの箇所が語っている第一のメッセージです。しかしこのことは私たちがこの世で必ずこれらの問題から助け出されるということとは意味しません。前にも見ましたように、クリスチャンの乗った舟は絶対に沈まないとか、飛行機は落ちないとか、クリスチャンの病気は必ず癒やされるということではありません。もしそうであるならクリスチャンはいつまでも死なないということになり、その結果いつまで経っても天国に行けないということにもなってしまいます！これらの記事が示すのはイエス様において神の国、神の恵みの支配が力を持って到来しているという事実です。けれどもまだ最終的な御国が来たわけではありません。その時まで私たちはこの世において様々な苦しみにも会います。それも神の深い御心の中にあります。しかし、その中で私たちが確信すべきは、イエス様は今やあらゆる災いにはるかに勝る力をもって、私たちとともにいてくださるということです。たとえどのような苦しみを通るとしても、イエス様は私たちを支え、守っていてくださる。そしてやがて御国が最終的に現れる時には、ご自身が勝ち取ったその祝福の中に私たちを生かしてくださる。そのイエス様を見上げて、イエス様に信頼するように！というのが今日の箇所が語っている第一の慰めのメッセージです。

2つ目に学ぶことは、私たちがより頼むべきイエス様はどんな小さな者の祈りにも向き合ってくださいということです。イエス様は今日の箇所では会堂司ヤイロの家へと向かっていました。彼はこの地域で重んじられていた人物でしょう。その家へと急い

でおられる、まさにその途中に一人の女性が割って入って来ました。彼女はヤイロと違って名前も記されていません。地位もありません。女性であり、しかも「汚れた者」とされていました。けれどもそんな彼女が近づいた時、イエス様は、そんなあなたに構っている暇はないとは言われませんでした。今は忙しいからあなたは後で！とはされませんでした。イエス様は彼女のために立ち止まり、その求めを受け止められました。そして「だれが自分に触れたのか」と問われ、彼女と出会うために時間を取られました。周囲が早く、早く、と気をもんでいる時にです。そして彼女に向かって「信仰があなたを救ったのです」と語り、祝福の言葉を語られました。つまりどんなに取るに足りない小さな者の祈りもイエス様は決して退けられないということです。私たちも目立たない存在かもしれません。社会的な地位もなく、重要な者ではないかもしれません。名も知られておらず、彼女のように汚れた者かもしれません。しかしそのような者がより頼む時、イエス様は、「あなたの信仰が救った」と言ってくださるので、そのように答え、向き合ってくださいる主です。その主を仰いで、私たちも彼女のようにイエス様により頼む者でありたいのです。

そして三つ目のメッセージは、私たちは彼女のように信仰の手を伸ばしているかということです。この箇所が持っているチャレンジの一つは、多くの人々がイエス様に押し迫っていたのにイエス様が「信仰の手」として感じ取ったのはただ一人の女性の手だけだったということです。私たちも今この礼拝へと集い、多くの人とともにイエス様のもとにいるような状態です。しかしその多くの人々の中に紛れていることに満足して、それで終わりである者でしょうか。それともそのただ中で、イエス様に届く、あるいはイエス様に感じ取られる祈り、また礼拝をささげている者でしょうか。私たちもそれぞれ切実な願いを持っていることでしょうか。自分の信仰のこと、生活のこと、健康のこと。また愛する周りの方々、家族、兄弟姉妹のこと。あるいは主の働きのため、教会のため、世界のために心にかけていることもあるでしょう。私たちは祈ったことがすべてその通りにかなえられるわけではないことを聖書から知っています。神の御心にかなうものだけが聞かれます。しかしそのことを知るあまり、イエス様に求めることをしないということはないでしょうか。長血の女のように手を伸ばしていないということはないでしょうか。ただ群衆の中で押し合いへし合いしているだけで、イエス様との生きた関係に生きていないし、彼女が与えられたような平安と祝福に生きていないということはないでしょうか。

私たちは大勢の人々に混じってイエス様の周りにただいるというだけで満足せず、長血の女のように、イエス様に向かって信仰の手を伸ばす者でありたいと思います。イエス様は私たちの祈りに気づいてくださいます。それを受け止めてくださいます。その私たちの祈りにも、彼女と同じように不完全なところがあるかもしれません。しかしイエス様はご自身により頼む祈りを受け止めてくださり、その信仰があなたを救ったと言ってください。そして彼女がそうだったように、私たちの思っていることや願っていること以上の祝福の世界を示し、導いてくださいます。そのイエス様を見つめて、私たちもイエス様に祈り、信仰の手を伸ばす者でありたい。そしてイエス様もたらしてくださっている神との平和の祝福、神の国の祝福の中に豊かに生かされて行きたいと願います。